「集まって生きるかたち」

――集まって住むことの意味を冷静に問い，価値観を刷新するような集合住宅

第14回 長谷工 住まいのデザイン コンペティションへ向けて

隈研吾×乾久美子×藤本壮介×池上一夫

隈研吾氏.

乾久美子氏.

藤本壮介氏.

池上一夫氏.

第14回を迎える「長谷工 住まいのデザイン コンペティション」は，2007年に長谷工コーポレーション創業70周年を記念してスタートしました．これまで建築を志す多くの学生に集合住宅にまつわる課題に取り組んでもらい，前回の第13回「多世代，多国籍で生まれ変わる集合住宅」では，核家族の居心地のよさが定着した現代におけるコミュニティの新しいかたちを提案してもらいました（応募数258点，登録数743件）．14回目となる今回は，京都大学総長の山極壽一さんにゲスト審査委員として参加していただきます．開催に先立ち今回の課題や，今，集合住宅をどう考えるかなどを審査委員の方がたに話し合っていただきました．なお，テーマ会議は新型コロナウイルス感染症の感染拡大に配慮し，Web会議にて行いました．（編）

インターナショナルな視点で考える課題

――まず，前回のテーマはいかがでしたか．

隈　前回の「多世代，多国籍で生まれ変わる集合住宅」は面白いテーマでしたね．インターナショナルな視点を要求する課題がよかったと思います．

乾　そうですね．海外からの留学生を含む3名が公開2次審査に進み最優秀賞を受賞されました．ドメスティックにならずに議論できたのは面白かったです．

藤本　前回のテーマはこれまでの課題の中でも，さまざまな切り口が考えられるものでした．応募案を見ると，住むこと，コミュニケーション，共同体，周辺との関係などに着目していて，リアリティを持った具体的な提案がされていました．中でも最優秀賞の「世界家産　―学びの集合体―」は魅力的でした．世界のさまざまな家の要素を集めるというシンプルなコンセプトでしたが，丁寧にアイデアが練られていて，住まうことの楽しさが伝わってきました．どこかまとまりきらない感じも含め，これからの住む場所・都市環境がこういう風になれば面白そうだと感じました．

池上　さまざまな世代の人の住まいを想定した集合住宅はこれまでも提案されてきましたが，前回はテーマに「多国籍」という言葉を入れたことで，より具体化され，アイデアの幅が広がったのだと思います．公開審査では隈さん，乾さん，藤本さん，田中元子さん（ゲスト審査委員）からの厳しいご指摘もあり，応募した学生にとっては貴重な経験になったのではないでしょうか．

コロナ禍以降の生活に求められること

――今回は，どのようなことを考えるとよいでしょうか．

池上　新型コロナウイルス感染症の影響により，多くの企業でテレワークが導入され，働き方が変わりつつあります．在宅時間が増えることで住まいへの要求が変わり，住宅と都市の関係が変わり，さらには都市そのものも変わっていくかもしれません．

乾　社会状況は日々刻々と変化しており，これからの暮らしはどうなるのかと不安や期待が入り混じっている状態なので，議論が深まるかもしれません．

隈　恐らく現在の状況はすぐには元に戻らないでしょうし，これからはウイルスと共存していく社会になっていくと思います．だからといって，社会的距離をとる非接触ばかりを考えていてもいけないですね．

藤本　そうですね．2011年の東日本大震災後に開催した第5回では，「再び『集まって住むこと』の豊かさ」をテーマにしました．震災の影響を鑑みて，人が集まって住む本質のようなものを考え直したいという思いでテーマを設定したことを覚えています．当時は集まって住むことに，どこか願いをかけているようなところがありました．しかし，今回は集まって住むことを冷静に問い直し，別の可能性も検討しないといけないと思います．

隈　その時の「再び」には，元の状態に戻ることをよしとするニュアンスを含めたのですが，今回の新型コロナウイルス感染症は，またそれとは違う気がします．緊急事態宣言が発令された後，私の事務所でもテレワークを導入したのですが，意外と仕事が回ることが分かりました．先日，事務所のスタッフにこれからどのようにして働きたいかアンケートを採ったのですが，半分くらいはテレワークを続けていきたいと回答していました．私は模型やサンプルを目の前にして設計することが好きなのですが，今後は設計も含めて働き方が変わっていくでしょう．

乾　そうですね．私の事務所でもある程度仕事の経験があるスタッフはテレワークでも仕事ができます．一方，入社1，2年目くらいの若いスタッフは，周りの人の動きを見ながら情報を吸収して学ぶことが多いので，難しいこともある．今回の経験で空間がさまざまな情報を伝えているということが分かりました．こうした空間が担う役割は，オンラインではなかなかつくれないように思います．

池上　私は4月に社長に就任したのですが，その最初の仕事がコロナウイルス対策でテレワークの導入や現場作業所における対応などの指示でした．当社でもリモートワークを推進し，緊急事態宣言期間は設計部の約7割がテレワークとなりました．緊急事態宣言解除後もテレワークを続ける企業が多いようですが，それでも経済活動が回っていくとなると，広く一般化していくでしょうね．そうすると働く場所と住む場所の概念が，これまでと大きく変わるのではないでしょうか．郊外の環境のよい家でテレワークで働き，週に1度長時間かけてオフィスに出社するような生活も十分可能になります．

藤本　私は海外出張が多く，以前から半分テレワークのような生活でした．今回，海外出張がほとんどキャンセルとなり，自粛期間なので自宅と事務所の2カ所を行き来しています．しかし，その生活に少しストレスを感じ，ある時間，自分が占有する場所ではない，セミパブリックのような場所をぶらぶら散歩する体験が私にとって重要であることに最近気付きました．自宅と事務所の「間」の場所が大切で，それがあって初めて私の生活が成立していたのだと分かりました．ひとつの理想的な場所よりも，自分がよく知る複数の場所を自由に行き来することが，生活として豊かなのだと思います．

乾　私は個人で設計事務所を経営していますが，個人で事務所を持つことのメリットのひとつは，家と仕事場を近接できることです．私は以前から自転車で移動できるくらいの圏内で生活をしていたので，自粛期間のこの状況でも生活は大きく変わっていません．思っていたよりも自分の生活圏は閉じたものであり，それでも充足しています．閉じた場所にずっといるのは苦痛ですが，かといって好き勝手自由にどこでも行ければよいというのでもなく，人の生活圏は意外に小さいものなのかもしれないと思うのです．

隈　以前から「箱（＝住まい）を出よう」とよく言っているのですが，自粛期間中は箱にずっと籠もっていて，とても疲れてしまいました．買い物をしたり，運動をしたり，レストランでご飯を食べたりと外で過ごす中間の時間が生活には大切なんでしょうね．

今，集まって生きること

――では，どのようなテーマタイトルにしますか．

隈　大勢で集まれないとか，テレワークが日常的になってきた今の状況を前提とした上で，どのような集合住宅のあり方が可能になるのかがテーマになるのではないでしょうか．

藤本　われわれは，ある種の集合体の中に住まざるを得ないのは確かなので，集まることでどのようにその状況を乗り越えていくのかが鍵ですね．

池上　ウイルスと共存して，社会的距離が必要になっても，人が集まって住むことの価値は変わらないと思います．この状況で，今一度「集まって住むことの豊かさ」を問うてみるのもよいのではないでしょうか．今までとは少し違う価値観が住まいに対して生まれてくるでしょうね．

乾　先ほど藤本さんも言っていた東日本大震災直後の第5回のテーマですね．過去のテーマをもう一度考えてみることは面白いと思います．ただタイトルに「住む」という言葉を入れないことで，集まることに対してもう少し概念的な部分から問うことができるのではないでしょうか．これまでと同じように集合住宅を考えてもらうのですが，その先に今までとは何か違う価値を考えてほしいです．

隈　「集まって生きるかたち」というのはどうでしょうか．今回の新型コロナウイルス感染症の影響で，生死の問題に誰もが直面しました．「生きる」という言葉は生死以外も意味します．それを建築として提案してもらうためにも，その「かたち」を考えてもらいたい．集まって生きることをかたちにすることには切実さもあり，これからを見据えた提案が期待できるように思います．

藤本　「かたち」がつくことで，「生きる」意味が生死だけではなく，住まいにも広がっていきそうです．

隈　今回は，そうした状況下でこれからの集合住宅はどうあるべきなのか考えてもらいましょう．では，ゲスト審査委員はどうしましょうか．

池上　京都大学総長の山極壽一さんはどうでしょうか．山極さんはゴリラ研究の第一人者です．ゴリラは人に似た生態を持ち，ひとりでは暮らせないそうです．今後われわれは社会的距離をとって生活していくことを考えると，これまで考えられていた人間らしい生活を送れなくなってしまう可能性があります．ゴリラの生態を研究している山極さんから，霊長類学の視点から今後の人の暮らしや関係性について考え，審査してもらえると面白いのではないかと思います．

乾　より広い視点で議論ができそうですね．では，敷地はどのような場所がよいでしょうか．新しい日常を考えようという大きなテーマがある中で，都心にするのか郊外にするのかでずいぶん計画の方向性が変わってくると思います．

藤本　日常の買い物ができ，ちょっとお洒落なお店などもあって，敷地内だけではなく外と関係性を築けるような場所がよいですね．集合住宅の建物の中だけで完結することに，あまりリアリティを感じられなくなってきているので，敷地の中に多様性を持たせるのか，それとも外との関係で多様性を確保するのか，どちらの可能性もあり得るような条件を設定したらよいと思います．

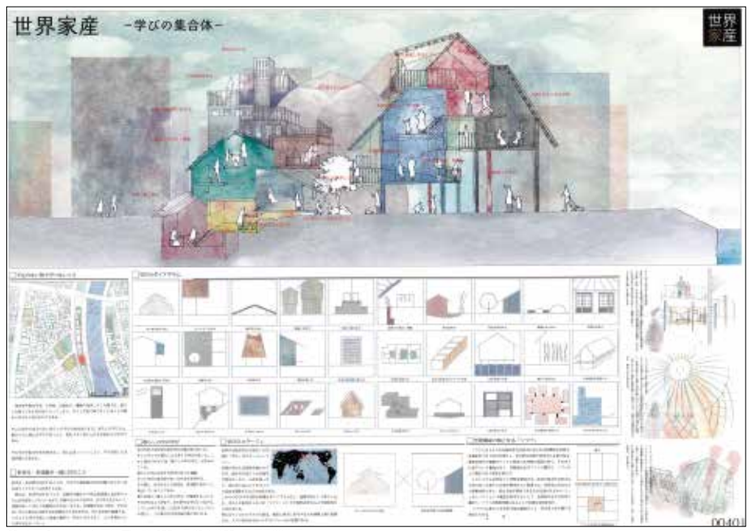
池上　敷地は，商店街，オフィス，さらには住宅や学校もあるような都心と郊外の中間のような場所を想定しましょう．敷地面積は前回と同じく1,000m^2．今回は新しいかたちを問うているので密度は低くして容積は200%，戸数は20戸に設定しましょう．

隈　そうですね．では，山極壽一さんをゲスト審査委員に迎え，今回も2段階で審査を行いましょう．

――それでは，第14回のテーマは「集まって生きるかたち」に決定します．

（2020年5月25日，Web会議にて

文責：本誌編集部）



第13回「多世代，多国籍で生まれ変わる集合住宅」最優秀賞作品
「世界家産　―学びの集合体―」　上野優佳　安達爽　大森佑将（法政大学大学院）

テーマについてゲスト審査委員の山極壽一さんからのコメント

山極壽一氏.

「集まって生きるかたち」というテーマはまさに人間の本質をついていると思う．人間は，はるか昔から移動と集まりを繰り返してきたからである．衣食住はそのためにあると言ってもよい．

人間はサルやゴリラなどの霊長類の仲間だ．肉食獣と違って毎日植物繊維を含む食物を採らねばならない．自然の食物は分散しているので，毎日移動して食物を探し，安全な場所でそれを食べる．人類の暮らしも700万年の進化史の大半は，食物を探して絶えず移動を繰り返す遊動生活だった．

しかし，サルたちは食べる時，仲間と喧嘩しないように離れるが，人間はわざわざ集まって団らんする．食事が人びとを繋ぎ，音楽や対話が心を解け合わせて社会力を強化した．その原則は12,000年前に農耕・牧畜が生まれて定住を始めても変わっていない．毎日同じ家に寝起きしても，人びとはさまざまな場所へ出かけ，出会いを繰り返すからだ．

家は閉鎖的であってはならない．つまり，家は人びとを集め，服は個性と役割を示し，食は人びとを繋ぐのである．要は新型コロナウイルス感染症後の世界でそれをどう表現できるかだ．私は個人の時間と共有する時間の配分が重要だと思う．建築は空間のデザインだが，そこに時間を取り入れてほしい．